

【研究ノート】

「山月記」

細井康子

一、研究の目的

高等学校国語教科書の「定番」教材としての『山月記』の主題の一面を、主人公の李徴の内面の変化に注目し捉えることが本論の目的である。

二、「定番」教材としての『山月記』

高橋広満(1996)は、高等学校国語教科書の「定番」として、「羅生門」「山月記」「こころ」「舞姫」の四教材を挙げている。その上で、それらの共通項として、「二分法的思考」に注目し、次のように述べている。

…略…二分法的思考は、「こころ」の教科書・指導書においてだけ明白なものではなく、実は他の定番にも色濃く認められるものだということである。「羅生門」では「盗人になること」と「飢え死に」をすること。「山月記」では「試作」と「生活」。「舞姫」では「愛」と「栄達」…略…きわめて截然とした二項対立的思考によって成り立っていることに注意したい。…略…後者(小説)の場合は、二項の前にたらずみ、どちらか

を選択しなければならなくなった主人公の生き方や運命こそが問題にされているのだ。

(「漱石研究」第6号 1996/5「定番を求める心」高橋広満)

こうした指摘を踏まえて指導書を参照すると、悲劇的運命におかれた状況を主題とするものが多いことが解る。例えば、「学校図書」の指導書には、「人間存在の不条理」、「過剰な自意識に悩む近代人の悲劇」、「芸術に執する者の宿命的な苦悩」、などの主題が挙げられているが、指導書等にも『山月記』の主題は、主人公の悲劇の運命が主になっていることが多い。

また、授業の展開のパターン化について、高橋(1996)、中村敦雄(2002)は、次のように指摘している。

授業の展開としては、ほぼパターン化されていると言っている。…(略)…たとえば、哀憐が感じた、李徴の詩に「欠ける所」について、「その『微妙な点』とは何か」との間。これに対して用意された主要な答えは、家族への愛情の薄さや人間性の欠如だとされている。教室では、そこから進めて、愛情・人間性の不足が声高に非難され、自意識過剰を戒める声が教師、あるいは生徒の口から発せられる。

(『山月記』をよむ「群馬大学教育学部国語教育講座編

著 2002/2 より『山月記』をどうやって救出するか？  
国語教育学の立場から」中村敦雄)

また、「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」に表現されている、主人公の矛盾した内面を説明してみようという問いもある。

(「漱石研究」第6号 1996/5 「定番を求めめる心」高橋広満)

以上の指摘のように、指導書の主題や、教科書の「学習」の部分では、主人公の置かれた現状に注目して問題設定をするものが多く、そこに重点が置かれ過ぎてしまいうきらいがある。

こうした授業展開は、作品を読み解くに当り、効果的なものではあるが、『山月記』の場合、「臆病な自尊心」や「尊大な羞恥心」の出所が、李徴自身の告白によるものだとすることに注目すると、『山月記』の新たな主題に気付くことができる。

本稿では、主人公の置かれた動かざる「現状」に主眼を置くのではなく、その「現状」に至る「過程」に主眼を置く読み方を提案するものである。

### 三、『山月記』の主題

『山月記』は、変化譚であるのと言うまでもない。し

かし、本稿では外面の変化の物語としてだけではなく、内面の変化の物語としても捉えられるのではないかと考える。

『山月記』は、悲劇の物語としてだけではなく、その悲劇から始まる、人間の内面の変化譚でもある、と言える。

李徴の悲劇の運命の告白という、告白の内容の方に重点を置くと、前段に見るような主題を導き出すことができる。が、その告白のされ方の方に注目すると、李徴の内面の変化に気付くことができる作品である。

#### ■李徴の変化(一)〜李徴の告白の順番から〜

虎になった理由について、李徴の告白を順に追うことにより、李徴の内面が変化している様子を捉える。

李徴は始め、「何故こんな事になったのだろう。分からね」と言い、「さだめた」と言っている。また、詩にも「偶々凶疾によりて」とある。

しかし、その後、衰憊に話をするうちに、李徴にとつて、「判らない」ものだったはずの原因について、人との交わりを避けた事、「尊大な羞恥心」や「臆病な自尊心」が自らを傷つけ、周囲を苦しめるだけの病であった事等に言及し、「虎と成り果てた今、己はようやくそれに気が付いた」と告白する。

李徴の内面を変化させた契機は、虎になるという「運命」であつた。そこで李徴は、今までの人生を振り返る時間と、かつての友人袁修という話し相手を得る。それによつて、李徴の内面の変化が生まれていく。

■李徴の変化(二)　く告白の方法からく

李徴は、「誰一人己の気持ちを分かってくれる者はない。ちようど、人間だつた頃、己の傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかつたように。」と告白している。結局、人間だつた頃も、虎になつた今でも、李徴の「気持ちを分かってくれる者はない」には変化がない。

しかし、人間だつた頃「努めて人との交を避けた」李徴が、今は、「この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたい」と空谷に向つて吠えている。ここに二つ目の李徴の変化を見ることが出来る。つまり感情を表現するかしないかの違いがでている。

■李徴の変化(三)　く告白の内容からく

李徴が姿を現わすかどうか、ということについても、前半と後半で違いがある。

前半では、袁修の「何故叢から出て来ないのか」という問いに対し、「どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか」、「必ず君に畏怖嫌厭の情を起こさせるに決まつている」と答えている。

後半では、自ら姿を見せる。その理由は、「我が醜悪な姿を示して、以て再び此処を過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こさせないためである」というものである。自らの姿を示そうとした李徴は、「醜悪な今の外形」を曝さなかつた李徴とは違い、自尊心や羞恥心を優先することなく、まず袁修の身を案じる事を第一としている。

#### 四、生徒の捉えた李徴の変化

以上を踏まえて授業した後、李徴が変化し、それによつて手に入れたものについて、生徒達は次のように捉えている。

\*意地もプライドも捨てて、人に交わる勇氣。人に自分の心を聞く勇氣。

\*自分のことを客観的に見る力。

\*自分以外の人进行う心。

\*人の気持ち、性格を理解することと、自分自身を理解すること。

\*周囲の人のことを気にする気持ちと、今までしなかつた努力を悔しく感じる心、自分の気持ちを理解してもらおうとする心。

\*人間であつたときは自尊心や羞恥心しかなかつたけど、虎になつてから感情が豊かになつたと思う。

\*おそらく初めてであるう自分の心を出し、ぶつけたことよつて、心が磨かれ、人の胆ともよべる、心の成長を遂げた。

\*始めは自分の運命を悲しんだりしているだけだったけど、最後にはそれを受け入れて少しだけ前向きになつた気がする。

\*自嘲癖は最後まであまり変化しない。ただ、理由はどうあれ、自分の（といつても自分がそう思つていられるだけ）悪い部分を積極的に見せようとした。

まとめると、李徴の内面が変化することよつて得られたものは、「自己に向き合う力」、「人を思いやる力」、「自分を表現する力」、「人に心を開く力」等が挙げられる。

## 五、まとめ

以上を踏まえて、『山月記』の中に一貫して流れているものは、大きく捉えると「変化」である。「人間」から「虎」への外面の変化や、よく指導書等で取り上げられる「自分」から「おれ」への呼称の変化、「月」の描写の変化がある中で、李徴の内面も変化していく。自らの「内面」をさらけ出すことをしなかつた李徴がそれを現わし、自らの内面を把握し、表現するようになる。

悲劇の運命、というのは、この小説の設定の一つであり、そこから変化の物語が展開されていく。作品の中に一貫して流れているものを主題とするならば、『山月記』は「悲劇の運命に苦悩することよつて生まれる変化の物語」として捉えることが出来る。

## 六、今後の課題

しかし、『山月記』は、すべてにおいて変化しているものではない。先程の生徒の李徴把握にあつたように、例えば、李徴の「自嘲癖」である。

その「自嘲癖」を伴つて作られている「詩」との関わりを考察することよつて、主題を捉えることができるのではないかと考える。この詩は、虎になつた原因について「分かれぬ」としている時のものであり、「お笑い草ついでに」と作られたものであるため、李徴が人間だった頃の様子が伺える部分でもあるからである。

また、最後に妻子の事を言及するに及び、「しかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻つて」という部分がある。李徴は、内面の変化を遂げながらも、青年時代からの自嘲癖から抜け出せずにもいる。この二つの「自嘲癖」が出てくる場面を比較検討することで、新たに主題を考へることができると考える。

(ほそい やすこ 平成十一年度修了生)